

平安朝文献にみる警蹕の魔除け機能―その由来について―

早稲田大学大学院文学研究科 東洋哲学コース博士後期課程一年 崔鵬偉

警蹕（けいひつ）とは、中国では、天子の出入する時に通行人を追い払い静めることをいう。日本では、出御・入御のほか、天皇の食事を運んだり神事を行ったりする時の先払いをもいう。日本でそれが魔除けとして機能すると明確に記されているのは、『徒然草』第一九六段が最初である。しかし、『大鏡』巻三「師輔伝」や、『台記』保延二年（一一三六）十二月九日条など平安朝文献からも、警蹕が魔除けの手段として貴族たちによって用いられるくだりが確認できる。しかも、そこから室町時代に多くみる百鬼夜行説話の一パターン、すなわち百鬼夜行の行列が賢人の先払いを聞いて退散する話が作られたのである。では、警蹕のこのような働きはいつどこでどのように形成されたのであろうか。

『江談抄』「警蹕事」には、『文選』に基づき、警蹕がもともと天皇を送迎する際に用いるのであると説明した後、公卿や公達らが私行の時にはひそかに用いているとの記述がみえる。これは警蹕の源が、中国に辿り着くべきことを裏付けている。警蹕に魔除けの効果があるという説については、『文選』巻七「甘泉賦」に、前漢の孝成帝の聖明をたたえ、百官が警蹕しているところを天の星々のように並び進むと、譬えていう記述がある。もし中国に源流を求めるなら、この「甘泉賦」の記述が警蹕に魔除けの効果を付加させた根拠の一つとなろう。また、『今昔物語集』巻十一第二十二「推古天皇、造本元興寺語」の典故とされる二十卷本『搜神記』巻十八「怒特祠」の話には、皇帝を護衛する行列の先頭に当たる旄頭騎の起源譚が記されている。旄頭騎が設置されたのは、樹神が化した青牛のような悪いものを追い払うためである。この旄頭騎に関する起源説から、警蹕に魔除けの働きがあると考えられたとしても不自然ではない。ただ、『文選』の記述や「怒特祠」の話はどういった思想背景で作られ、また日本においてどのように展開していたのか。本発表では、平安期の諸文献を手掛かりに明らかにしていきたい。